

特権への自覚／人権への覚醒

放送大学客員准教授 川中 大輔

コロナ禍の日々も一年が過ぎ去った。コロナへの対策として示された「新しい生活様式」への適応も進み、既に「新しさ」は感じられなくなっている。感染拡大第一波に見られたような大きな混乱／困惑も見られなくなった。不自由さは残っているが、街中を歩けば「平穏な日常」を取り戻したかのような空気感に包まれる。こうした変化は好ましいこととされている。果たして、本当にそうなのだろうか。社会全体が危機に瀕し、誰しものが困苦する中で生じていた緩やかな連帯感／結束感は薄らいでいないだろうか。

武谷三男 (1979: 3) は、連帯の論理に基づく「人権の立場」と、差別の論理に基づく「特権の立場」とが一人の人間の内に拮抗しながら存在していると述べている。コロナ禍で困窮させられている方々に対して、「人権の立場」からボランティア活動やクラウドファンディングに参加した人々は決して少なくなかった。例えば、多様な食支援の活動が全国各地で見られ、また、オンラインでの学習や交流の場づくりなど新たな形態の活動も幅広く展開されていった。女性や外国人、障害者、住居喪失者などへの相談援助や各種申請支援、そして現場からの政策提言においても市民の働きは大きなものであった。

コロナ禍の中で厳しい生活を余儀なくされている人々は今なお数多くいる。寧ろ、困難な状況から離脱できる環境にある人々とそうではない人々との間に距離感が出てきていることを鑑みれば、「人権の立場」からの連帯が試練を迎えているとも言える。しかし、一年前に見られたような連帯の働きの勢いは減じているように思われる。無自覚の内に「特権の立場」から現在の状況を眺め、自らに利する動きを求めている人が増えているのではないだろうか。ワクチン接種を一つ例にとっても、「私の順番」を気にかけていても、ワクチンの配分がグローバルに公正なものとなっていない問題を強く気にかけている人は限られているだろう。私欲に基づいて非倫理的な行動をとる時、私たちの多くはそのことに自覚的ではないとされている。これは「動機付けられた見落とし」と呼ばれているものである (ベイザーマン 2021: 19)。自らが特権を行使していることを見落とししているのかもしれないという認識が「人権の立場」への揺り戻しをもたらすこととなる。

こうした「特権の立場」への自覚が、現代社会で小さくさせられている／弱くさせられている／遠ざけられている他者への理解／接近で重要なものの一つとなる。様々な人々の苦しみの声が聞こえてくる中で、私が深刻な苦しみを味わっていないのはなぜなのか。私が苦境に陥らずに済むことを支えているものは何なのか。そして、私の生活を成り立たせているものが十全に配分されていない人々は一体誰なのかと想像力を働かせる中で、「人権の立場」への覚醒が進むこととなる。ここで必要とされる想像力は、自らの価値観や生活との連続性／類似性が感じられる他者への「戸惑いなき想像力」ではない (阿部 2014: 8)。理解や共感に難しさを伴う想像力である。そうした想像力を発揮した先に現れてくる他者と実際に関わりを持つとうとすれば、立ちすくむことも珍しくないだろう。この躊躇いを恥じて隠すのではなく、敢えて声に出し、響き合う協働者を探し求めていくことが、「人権の立場」からの行動につながっていくこととなる。こうした連帯の論理に基づく動きが私たち一人ひとりに今求められているのではないだろうか。

参考文献

- 阿部潔, 2014, 『見知らぬ者たち』へのエンパシー, 『J-CEF NEWS』No.5, 日本シティズンシップ教育フォーラム, pp.8-9.
- 武谷三男, 1979, 「特権と人権の思想」, 武谷三男編『特権と人権—不確実性を越える論理』勁草書房, pp.1-20.
- ベイザーマン, マックス H. (スコフィールド素子訳), 2021, 「倫理的なリーダーこそ『功利的』な意志決定を下す」, 『DIAMONDハーバード・ビジネス・レビュー』46(1), pp.16-27.